

室町一丁目 リバーウォーク北九州

福岡県
北九州市

組合施行（3.58ha）平成18年3月工事完了

高度な都心機能を集積させた大型複合施設を整備し、 都心の新しい顔づくりを図った代表例

地区選定の主旨

当地区は古くから小倉の商業・業務の中心地であり、昭和33年の小倉駅の移転に伴い商業ポテンシャルが低下していたが、本事業により隣接する紫川の親水空間の整備に併せ、劇場を中心とした「文化ゾーン」、放送局、新聞社からなる「情報発信ゾーン」、物販・飲食・シネマコンプレックスからなる「商業ゾーン」及び大学キャンパスからなる大型複合施設を整備し、賑わいを創出した。また、著名建築家による特徴ある建築デザインが、周辺の公園内に所在する小倉城、高層の市庁舎のコントラストを生んでおり、これらが一体となり市のシンボルゾーンを形成している。

再開発の目的と概要

小倉市街地の賑わいは、移転後の小倉駅を中心に形成されたが、それは都心としての広がりや回遊性に乏しく、室町一丁目地区に目を向けると、小倉駅との間を流れる紫川によって人の流れが分断されていた。また、早くから市街化が進んでいた当地区は、老朽化した建物が多く、街としての活気が薄れていたことから、隣接する紫川や勝山公園などの恵まれた周辺環境を活かした都心のランドマークとなる施設を市街地再開発事業により整備することとなった。

本再開発事業では、賑わいの核となる物販、飲食、アミューズメント等の商業施設と、市民の要望が多かった大・中・小の3つのホールからなる北九州芸術劇場、北九州市立美術館分館の整備に加え、朝日新聞社、NHK放送局の移転入居、さらに西日本工業大学のデザイン学部の新設立地により、若さあふれる学生を含めた幅広い年齢層に受け入れられる大型複合施設「リバーウォーク北九州」が誕生した。

建物のデザインも特徴的で、世界的な建築家を核とする設計グループ5者によるプロポーザルコンペを実施し、新しい都心のランドマークに相応しいインパクトのあるデザインを提案したジョン・ジャーディー案を採用した。建物の色彩には、日本の自然や伝統の色として「漆の赤」「日本瓦の黒」「漆喰壁の白」「大地の茶」「収穫期の稲穂の黄」を採用することで、生命の純粹さを表現し、訪れた人々にユニークな印象と感動を与え、記憶に残る交流の場を整備することができた。

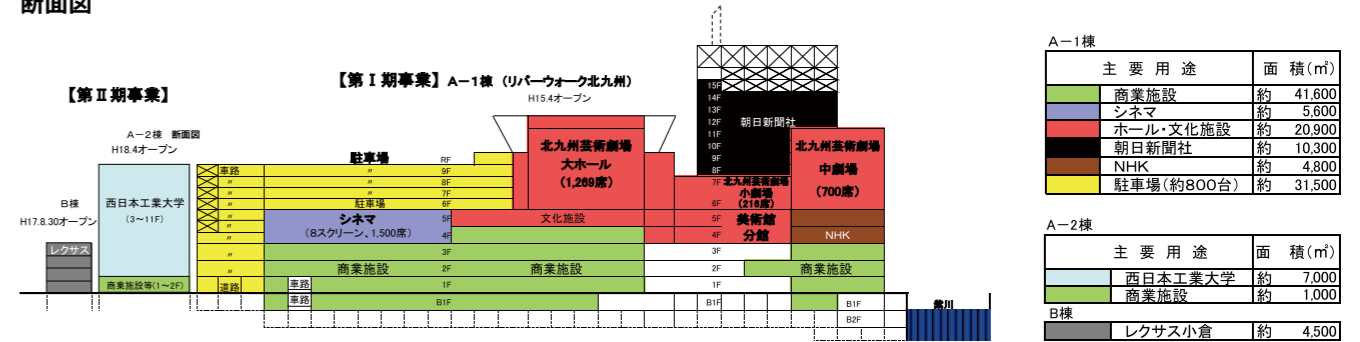


従前の地区全景



完成写真

断面図



事業の評価

本再開発事業は、河川改修をはじめ、周辺の公園、道路、市街地整備を総合的に進める「紫川マイタウン・マイリバー整備事業（MM事業）」において、中核プロジェクトとして位置づけられた。

MM事業により、当地区に隣接する勝山公園や小倉城、紫川一帯には新たな人の流れが生まれ、紫川のほとりや小倉城のお堀沿いにあるオープンカフェテラスでは、様々な世代の人たちが憩う姿が見られるようになり、当地区から小倉駅に至る動線上で紫川に架かる2つの橋の歩行者交通量が2

～3倍に増えるなど、小倉都心部の回遊性が高まった。また、休日にリバーウォーク北九州へ訪れる車の半数近くを市外ナンバーが占め、200万広域都市圏のシンボルとして定着している。

リバーウォーク北九州の整備を契機に、持床会社と地元商店街や自治会等が連携して四季折々のイベントが開催されるなど、市民参画によるまちづくりも展開され、「まち」としての活気が戻り、周辺で民間開発も進められてきた。



紫川の親水空間の整備



施設内ミスティックコートでの子ども水遊びイベント



周辺・小倉城のお堀沿いにあるオープンカフェ

再開発後から現在までの状況

リバーウォーク北九州では、魅力的なテナントの誘致や様々なイベントの実施により、一定の賑わいを維持しているが、来場者数は開業当初の約7割程度で推移している。現在、北九州市では外国人観光客が増加していることもあり、小倉城などの周辺施設とタイアップしたインバウンド対応に力を入れている。また、「コト消費」に対応したテナント誘致に取り組むなど、北九州市に賑わいの拠点として新たな魅力の創出を目指している。



クリスマスのイルミネーション